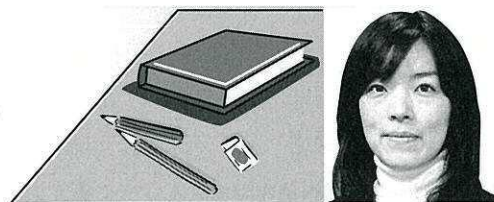


# 学生時代と図書館 94

## 「坂の上の図書館」

島村典子



公共の図書館に自転車で通える場所に住んでいたためか、物心がついた頃から、母に連れられてよく図書館を訪れた記憶があります。図書館は丘陵を切り開いてつくった、緑豊かな文化公園の一角に位置していました。その立地ゆえ、図書館への道のりには、緩急さまざまな坂が待ちかまえています。新興住宅地を縦貫する長い坂道を上り、曲がりくねった林道を抜けた後、とどめを刺すかのような勾配のきつい坂を一気に上らなければなりません。この険しい坂道と、これから出会うであろう10冊の本への期待とを天秤にかけ、本の重みが上回ったところで、えい！と腹をくくって出かけたものです。

図書館へ以前にも増して足しげく通うようになったのは、高校生の頃でした。今では珍しいと思いますが、当時、私には文通相手があり、彼女との手紙のやりとりのなかで、本の読後感を伝え合うことが定例となっていたのです。多感な若者の心情をうたった流行りの詩や、武者小路実篤の一節、ヘッセ等々…彼女から手紙を受け取った日の週末は、はやる心を抑えながら、図書館への坂道を急ぎました。彼女の人となりや世界観に傾倒していた私は、本を通して彼女の精神世界を垣間見ようとしていたのかもしれませんが、また、おもしろい本があれば報告しようと、開架図書の背表紙を気の向くままに見て回ったことも、今となってはよい思い出です。

そんな青春時代の思い出がつまった地元の図書館から少し遠ざかり、本格的に大学の図書館を利用するようになったのは、大学院で現代中国語の文法論を専攻するようになってからでした。

大学の図書館には、論文執筆に必要となる専門性の高い資料がそろっていましたし、大学に所蔵されていない文献であっても、近隣の大学図書館から複写サービスを受けることができ、

その利便性を大いに享受しました。しかし同時に、大学図書館の書庫は、私にとって、膨大な蔵書が眠る迷宮のような場所でしたので、事前に必要な文献の配架場所を確認し、リストを準備して、効率的に資料収集するという作業が毎回欠かせませんでした（それでも迷うのですから、困ったものです…）。

しばらく足が遠のいていた地元の図書館に再び通いだしたのは、修士課程二年目の夏休みでした。初めての学会発表を目前に、予稿集の原稿が思うように進まず、わらにもすがる思いで図書館を訪れたのです。照りつけるような日差しのもと、自転車をこぎながら、行きの坂道で頭のなかを巡るのは、当時取り組んでいた文法現象のことばかり。図書館に着くやいなや、採用できそうな理論や、手がかりとなる文法事象がないか、言語学図書のコーナーで背表紙を頼りに、目についた図書を次から次へとめくってみました。

数日、図書館に通いつめて作業を続けたある日、当時の私にはまだなじみの薄かった言語類型論の著書に、突破口となる現象を発見したのです。その時の霧が晴れる思いは、今でも忘れることができません。それ以来、あらゆる可能性を探るために、少しでも関連のある文献には目を通すことが習慣となりました。

実家を出て新しい土地に越した今、あの坂の上の図書館に行く機会はなくなり、図書館までの懐かしい道のりも、開発が進み、実家から図書館までをほぼ一直線に結ぶ大きな道路が貫通しました。

そろそろ新しい土地での生活も落ち着いてきた頃。後半の人生（と娘の人生）に寄り添ってくれる図書館を探しに出かける時かもしれません。

しまむら のりこ（講師・中国語学）